時評

歌い続けること

黒岩剛仁

東日本大震災から九か月が経ち、初めての年越しを迎えようとしている。短歌総合誌では、当然のことながら、表現者としての震災への向き合い方や言葉、表現の力を問う特集が、今なお組まれている。「歌壇」十一月号では、川野里子、穂村弘、吉川宏志の三人が、「震災後の表現の行方」と題して語り合っていた。

鼎談の最後に、穂村は次のように言う。

（前略）いろいろな人が持っている色の違うもの、あるいは温度の違うものに共通の災厄が今回は降り注いだわけだから、認識が共通かどうかはともかくとして。その中から自然に出てくるものがあるという感じかなあ。

このテーマに関しては、穂村に限らず、誰も断言めいた物言いはできず、結論などもあるわけがないのである。短歌という表現を選び、これからも続けていこうとするなら、自らの立場なりに歌い続けていくしかないのだろう。

そのような観点からも、「短歌研究」同月号に掲載された大口玲子のいつもながらの力作（特別作品「入園前夜」二十首）に注目した。そこには、仙台に夫を残し息子と九州（宮崎）へ避難している大口の現時点での日常生活が、確かな文体で詠まれているのだった。

・原発を離るれば夫も遠くなりSkype（スカイプ）の画面に小さく欠伸す
・仙台市震災復興本部より転出者われに書類が届く
・被災者ならず避難者であるわれはいつも喋り過ぎなり取材受けつつ
・原発事故収束前に復興を語るなと言へば記者は怯みぬ
・なぜ避難したかと問はれ「子が大事」と答へてまた誰かを傷つけて

復興へ向けて進みつつある仙台からの〈転出者〉である自らを認識しつつ、〈被災者〉と〈避難者〉とを厳しく峻別する作者。「子が大事」と答えることにより傷つけてしまうのは、夫であり、また、子のために避難したいと考えつつも事情が許さない、被災地の多くの人たちでもあるだろう。

・この夜のよろこびは子が選びたりJA尾鈴のデラウエア買ふ
・市役所から九州電力（きうでん）までを歩き通し「デモ楽しかつた」息子が笑ふ
・帰らうと息子を呼べばはにわ園の埴輪を真似てまるく口開く
・園長と子の爆笑を遠く聞きボールペンで書く入園願
・すみれ組の教室前で涙ぐむ息子をわれは振り返らざる

息子を詠んだ歌も、適度な突き放し方がいかにも大口らしくていい。特に三首目など、母子の歌として記憶に残るのではないか。

・東京を目指さぬといふコンセプト『宮崎美少女図鑑』めくれば
・幼稚園の庭暮れなづみ泣きさうなマリア像小さきイエスを抱きて

この二首にも、現在の作者の思いがそこはかとなく反映しているような気がする。